

20130515日本危機管理学総研\_議事録

日 時：2013年5月15日（水）19:00-21:00

場 所：東京・竹橋 ちよだプラットフォームスクウェア

テーマ：「首都直下地震から生き残るために必要な情報とメディアは何か？

～東日本大震災、阪神淡路大震災の発生後の24時間から学ぶ～

発表者：渡部秀成氏（LLC つくばリスクマネジメント）

横尾俊成氏（街をつなぐ防災情報マガジン「Standby」発行人／港区議会議員）

茂木正光（日本危機管理学総研理事長）

参加者：参加者 10人（発表者除く）

（経済アナリスト、財務コンサルタント、会社員、理学療法士、マスコミ、地方議員、NPO法人理事長、行政書士・司法書士など）

発表

1. 茂木正光（日本危機管理学総研理事長）

- ・都市の直下を震源とする大地震や広域的な震災の場合、その発生後8時間は行政の対応を期待できない
- ・日本危機管理学総研にて2004年11月～12月、大都市圏の地方自治体の防災担当者を対象に行ったアンケートでも、「発生後3時間以内に、行政による有効な危機対応ができますか？」という質問に対し、「いいえ」、「不明」との回答は合計で49%となっていました
- ・また、都市の直下を震源とする大地震である阪神・淡路大震災では、兵庫県庁や神戸市役所も被災し、対策本部の立ち上げですら発生3時間後、実際に機能を始めるのはそのさらに後でした
- ・この時間帯は行政を頼ることはほとんどできず、各人で事前準備を行って、生き残るしかありません
- ・そこで、事前準備として、各人の年齢、性別、職業などの属性と、場所や時間帯ごとに具体的に検討をする必要があります。このためには書き出しておくことが有効であり、この書き出したものを家族、会社にて事前に共有しておく必要があります

2. 横尾俊成氏（街をつなぐ防災情報マガジン「Standby」発行人／港区議会議員）

①港区における課題

- ・高層住宅居住者の割合は67.0%  
高層住宅の5階ごとに備蓄倉庫を設置  
建設の際に、防災計画を策定する必要がある  
港区はマンション自治会の設立・加入を高層住宅の薦めているが、課題もある。行政に出来ることには限界がある
- ・1人暮らしの高齢者の割合は40.2%  
個人情報保護の壁で要介護者がどこにいるかわからない  
助けたくても助けることができないのが現状になっている

- ・ 区からの情報や備蓄の受け渡しが行われる町会・自治会への加入数は約50%  
50%の加入していない人をどうするか？
- ・ 給水所が特定の場所に集中。首都直下地震発災の5日後には生活のための水が尽きることが予想される  
断水した際の水の備蓄は各家庭にあるか？
- ・ 防災訓練の参加率は3%
- ・ 避難所  
運営の方法や誰が避難するかで機能するかどうかが変わるがしっかりとしたシミュレーションはできていない

## ② Standbyの概要

- サバイバルできる個人が助け合えるつながりを作る
- 既存のコミュニティと新しいコミュニティをいかにつなげるか
- 避難所のシミュレーションをしている

## 3. 渡部秀成氏 (LLCつくばリスクマネジメント)

### 「テキストマイニングとリスクコミュニケーション」

- リスクコミュニケーションとは専門家のわかりにくい用語をいかにわかりやすく使えるかということ

### まとめ

- ・ 人の行動パターンから考える (メッセージは最終的に伝わるのが大切)
- ・ 省庁別・企業単位調査データのリミックスをする
- ・ 上記、情報から「事前」に発信情報のストックをする

## ①東日本大震災時のTwitterの書き込み

- 震災時はリツイートが約2/3 (情報拡散のサポートとして)
- リツイートはマスコミ情報が多い。特にNHK (NHKへの信用力は高い。この信用に応えている)
- CNNなど海外情報も拡がりやすい。国内メディアへの不信感層が広がっている

## ②東日本大震災時の1億ツイートを分析

- 首都圏のツイートは地震のことが多い (被災地のツイートは少ない。まさに被害に遭っているから)
- ツイートは時間経過とともに生命・身体 (安否) →生活・ライフライン→仕事と移行していく  
それぞれのタイミングで、事前に用意しておいた情報を流していく必要がある

## ③東京23区の議会における帰宅困難者対策

震災後、議論が活発したことがわかる。ただし、ばらつきがある

④官公庁の Twitter を事前にフォローしておく

⑤個人情報とどこまでをみんなに知らせるか? どうバランスさせるか?

⑥どう行動させるか?

人間の生体リズムに合わせて書き込みを検討する  
相手がどう受け入れるかを考えて発信する

⑦人の判断システム (2段階になっている)

ダニエル・カールマンの研究  
視覚的に伝える。パッと見てわかるようにする  
非常時には視野が狭まる。それに合わせて、発信する

⑧人が1秒間に読むことのできる文字数に合わせて書き込みを行う

⑨言葉の選び方

「避難して」か「逃げて」か。それぞれを言われた時の反応の差について年齢別に言葉の反応時間を計測する研究がある。

⑩Twitterの投稿方法

連投して面積で伝える。これにより目が集中する  
事前にツイートを用意しておく

⑪震災発生時のリツイート

リツイートされやすい投稿者・内容は日頃からの信用性による

⑫拡散されたツイートの共通点

件名、立場、内容 (行動につながる言葉)、数字が明確に表示されている

⑬メッセージに優先順位をつける

以上